

一八六六年恐慌

三宅義夫

一

さきに一八五七年恐慌について見たさい、イギリスの経済は一八五八年半ばごろからまず木綿工業が顕著な好転を示してきたこと、しかし全般としては一八五八年はまだよくなかったが——「一八五八年は十九世紀後半の最悪の年の一つであったのであって、おそらく一八七九年または一八八六年よりもっと悪かった」(Clapham, Bank of England, vol. II, p. 238—9)。「恐慌の苦悶は一九五八年の輸出の減少のうちに示されている」(マルクス、「工場工業と商業」、『トリビュン』一八五九年九月二十三日号所載)——そのあとしだいに沈滞から抜け出してつぎのあらたな循環に入ってしまったことを⁽¹⁾、そして一八六〇年四月の『工場検査官報告書』においては各地区の報告が口をそろえて、最近の半年間のきわめて活潑な工業活動を確認しているという状態にいたったことを(マルクス、「イギリス工場工業の状態」『トリビュン』一八六〇年八月七日号所載)見た。木綿工業においては、「一八六〇年にはイギリス木綿工業の絶頂」(『資本論』Bd. I, S. 479, 長谷部訳、青木版七三二ページ)を示した。他方、イングランド銀行のバンク・レートは一八五

七年十一月のパニックのち一八五八年二月には数年来なかった低い水準に下がり、一八五九年春に証券取引所が一時的に混乱したときを除いて一八五八年、五九年は三パーセントないしそれ以下という低さをつづけた。

(1) 既述のようにマルクスは上の『トリビュン』論説、「工場工業と商業」のなかで、「わずか数年の間のいくらかの動揺ののちには、商業循環の一期間における繁栄の最高点を示した生産の目盛りが、つぎの期間の出発点となる」という「法則」が存在するとして、「すでに一八五九年には、一八四七—五七年の期間の最高点（すなわち一八五七年の額）が、あたらしい商業循環の出発点——生産力がふたたびそこまではとうてい後退しない点——となっている」と述べている。すなわちここでは、前の循環期間の「繁栄の最高点を示した生産の目盛り」があたらしい循環期間の「出発点」となるとし、そして一八五九年の大きさをかかると見ていたわけである。だが『資本論』ではこれは「恐慌以前の最近の繁栄期の最高限度が、つぎに生じる繁栄期の最低限度として再現して」云々と改訂し（傍点—三宅）、そして本稿で見る期間のところについてつぎのように記している、——「……一八五七年には一億二千二百万『ポンド』という最高限度に達した。一八五八年には一億一千六百万に減少したが、すでに一八五九年には一億三千万に増加し、一八六〇年には約一億三千六百万、一八六一年にはただの一億二千五百万（ここまで、またしてもあらたな最低限度が従来の最高限度より高い）、一八六三年には一億四千六百五十万であった」と（『資本論』Bd. II, S. 546、長谷部訳、青木版七〇九—一〇ページ、傍点—三宅）。

ちなみに、一八六二年の右の輸出額は一億二千四百万ポンドであった。またマルクスの右の記述は『資本論』中の「すくなくとも大部分は一八六四年および一八六五年に書かれている」（『資本論』第二部へのエンゲルスの序言）とされている第三巻のなかのものであり、右のように数字は一八六三年どまりとなっているが、この期間のグレイト・ブリテンおよびアイルランド、つまりユナイテッド・キングダム（連合王国）の輸出額はつぎのような動きを示した（Statistical Abstract for the United Kingdom 1853—1867, No. 15, 1859—1873, No. 21, E・ヴァルガ監修『世界経済恐慌史（一八四八—一九三五年）』、永注道雄訳、第二冊、六六—六七ページ、一〇二—一〇三ページの引用による。またメンデルソン『恐慌の理論と歴史』、飯田貫一他訳、(1)、三六〇ページ*）。

(単位百万ポンド)

1857	122.1
1858	116.6
1859	130.4
1860	135.9
1861	125.1
1862	124.0
1863	146.6
1864	160.4
1865	165.8
1866	188.9
1867	181.0
1868	179.7
1869	190.0
1870	199.6

著 J. R. T. Hughes; *Fluctuations in Trade, Industry, and Finance, a Study of British Economic Development 1850—1860* における一八五七—一八五九—一八六〇年の回復は急速であったが——一八五九—一八六〇年の回復についてはさうにより高かった——、産業の回復は一樣ではなかった。若干の地域、たとえばスタフォードシアでの生産および雇傭は一八五七年の水準をけつして回復しなかったし、また国内商業は一八五九年においてもまだ不活潑であった。一八六〇年になっても懸念すべき諸徴候が存在していた。収獲は不良であったし、貿易は悪化を辿っていると報ぜられ、バンク・レートは一八五七年パニックの終了以来はじめて五パーセント以上に上昇した。イングランド銀行の準備金は主として穀物の大量輸入のために減少し、一八六一年二月にはバンク・レートは八パーセントに達し、そしてアメリカの内戦によって輸出貿易はまもなく切り裂かれることとなった」(p. 30)。この一八六〇年末以後のバンク・レートの動きについてはのちにまた見る。

* なお既掲の『トリビュン』所載のマルクスの論説「人口、犯罪、貧困(Population, Crime and Pauperism)」(一八五九年九月十六日号)および「工場工業と商業(Manufactures and Commerce)」(同年九月二十三日号)は当時出されたこの *Statistical Abstract* の 1844—1859 を取扱ったものであるが、そこでマルクスはつぎのように述べている、「狭い欄に並べられたこれらの数字はいかにも無味乾燥に見えるが、じつさいには、言葉飾りを飾り立てた馬鹿ばなしや政治的な欺弁でみたされた分厚な書物よりも、国民の一般的发展の歴史にとってずっと貴重な資料を与えている」と(大月選集訳、第九卷、一八九ページ)。

マルクスは一八六〇年一月に、「僕の考えでは、いま世界で進行している最大の事件は、一方ではブラウンの死に

よって開始されたアメリカの奴隷運動であり [John Brown. 一八五九年十月のハーパーズ・フェリー Harper's Ferry の兵器庫襲撃を指揮した]、他方ではロシアにおける奴隷運動である。……僕は『トリビュン』でいま、ミズーリであたらしい奴隷蜂起がおきたが、もちろん鎮圧されたという記事を読んだ。だが信号はもはや掲げられたのだ。事態がしだいに重大になってゆけば、そのときマンチェスターはどうなるか? とエンゲルスに書き送っているが (一八六〇年一月十一日付) ——これにたいするエンゲルスの返事、「アメリカとロシアとにおける奴隷運動の意義についての君の見解はすでにいまや確証されている。ハーパーズ・フェリー事件はミズーリでの余波とともに、その実を結んでいる。南部の自由黒人はいたるところで州外に追われている。そして第一回ニューヨーク綿花報告書 (一八六〇年一月十一日、W・P・ライト Wright 商会) で僕はいま、栽植農場主たちがハーパーズ・フェリー事件からおこりうるあらゆる結果に対処するために港にその綿花を急送しているという記事を読んだところだ」 (一八六〇年十月二十六日付) ——、この一八六〇年十一月には奴隷制反対の共和党のリンカーンが大統領に当選した。そしてこれにたいして同年末南カロライナが連邦 (Union) から脱退したのをはじめとして、翌一八六一年一月には南部六州——綿花生産地——が相ついで連邦から脱退し、南部連合 (Southern Confederacy) が組織された。かくしてついに同年四月に南北の内戦がはじまり、この内戦は長びいて一八六五年四月までつづくこととなったのであるが、このアメリカの南北戦争は一八六〇年代のイギリスの経済循環にたいして大きな影響をもたらすこととなった。

たとえば、マルクスはイギリス木綿工業について前記のように「一八六〇年にはイギリス木綿工業の絶頂」とするとともに、そこで「インド、オーストラリアならびにその他の諸市場ははなはだしく充溢して (überfließen) 一八六三年になってもまだ全ストック (Quark) が吸収されなかったほどであった。フランスとの通商条約。工場および機

械の老大な増加。一八六一年には昂揚 (Aufschwung) がしばらくつづいたが、反動来、アメリカの南北戦争、綿花飢饉 (Baumwollnot)。一八六二年から六三年までは完全な崩壊 (Zusammenbruch) としるしている (『資本論』 Bd. I, S. 479, 長谷部訳、青木版七三二ページ、傍点—三宅。) そしてつづいてつぎのように述べている。「一八六〇年から一八六一年までの世界市場の状態から察せられることだが、綿花飢饉は工場主たちにとっては具合のよい時機にやってきたのであり (gelegen kam)、ある程度は有利だったのであって (zum Teil vorteilhaft) この事實は、マンチェスター商業会議所の報告中で承認され、議会ではバーマストンやダービーによって公言されたところであり、また諸々の出来事によって確証されるところである。もちろん、一八六一年には連合王国の木綿工場二八八七のうちには多数の小工場があった。……小工場の多くは織物工場であった、それらは一八五八年以来の繁栄期中に設立されたものであった。……これらの小工場はたいいてい破滅した。彼らは、綿花飢饉 (Baumwollpech) のために妨げられた商業恐慌によっても同じ運命に見舞われたであらう」 (S. 479—80, 訳、七三二—二三ページ、傍点—三宅。)

このように、一八六〇年の木綿工業はその過剰生産、諸市場の充溢によって商業恐慌の危機を孕んでいたのがあったが、たまたま南北戦争による綿花飢饉のためにそれが起らずにすんだ。だがまた、この綿花飢饉——「再生産のものと本質的な要素の一つたる一原料がしばらくの間ぜんぜんなくなった」という「一八六一—一八六五年の綿花飢饉 (Baumwollennot)」 (『資本論』 Bd. III, S. 143, 長谷部訳、青木版一九四ページ)——によつて、イギリスの木綿工業は「一八六二年から六三年までは完全な崩壊」 (前掲) となり、「綿花恐慌 (Baumwollkrisis)」 (Bd. III, S. 143, 訳、一九四ページ。なお一八六一—一八六五年の綿花恐慌 die Baumwollkrisis 1861—1865—Bd. III, S. 146, 訳、一九八ページ、第三部第一篇第六章第三節の標題) 「綿業恐慌 (Krisen der Baumwollindustrie)」 (Bd. I, S. 470, 訳、

七一九ページ、第一部第四篇第十三章第七節の標題）が生じることとなった。つまり、当時なお第一の基幹産業であった木綿工業は原料の絶対的不足ということによって「恐慌」状態に陥ることとなった。⁽²⁾

南北戦争はイギリスの産業循環にたいして直接的にも――間接的には他の繊維工業の拡大、等が生じた――たとえばこうした影響を与えた。いいかえれば、一八六〇年代のイギリスの経済循環は一八四〇年、一八五〇年代の一八四七年恐慌、一八五七年恐慌について、ほぼ同じ十年の周期で一八六六年に一般的恐慌となったが、しかしこの一八六〇年代にあつては南北戦争という外的要因によって大きな影響を受けたのであつた。

(2) 上のように「一八六一―一八六五年の綿花飢饉」あるいは「一八六一―一八六五年の綿花恐慌」としるされているが、南北戦争は一八六一年四月から一八六五年四月までつづいたとはいえ、この間ずっと綿花飢饉であり、綿花恐慌であつたわけではない。

マルクスはさきに一八五七年秋から一八五八年三月にかけて原稿『グルントリッセ』を書き、一八五九年六月には著書『経済学批判』第一冊を刊行したが、そのあとただちに第二冊にとりかかり、一八六一年八月から一八六三年六月にかけては「ノート二十三冊からなる四折り版一四七二ページの『経済学批判』という原稿」⁽³⁾（『資本論』第二部へのエンゲルスの序言）を書き――そのうちの主としてノート第六―第十五冊からのちに『剰余価値学説史』が編集された――、また一八六四年、六五年には「すくなくとも大部分は一八六四年および一八六五年に書かれている」とされている（同上エンゲルスの序言）現行『資本論』第三部の原稿を書いた。そして翌一八六六年には現行『資本論』第一部となつた厚稿の書き上げをはじめ、同年十一月「厚稿の最初の一束（der erste batch Manuscript）」をマウスナーに送つたが（一八六六年十一月十日付マルクスからエンゲルスへの手紙、同十一月十一日付エンゲルスからマルクスへの手紙）、

翌一八六七年三月にはこれを完成して、四月十二日残りの厚稿を携えてハンブルグのマイスナーのところに仕掛けるにいたった。これに同年六月、付録につけることにした価値形態をかき、そして九月に初版が刊行された。また一八六四年九月二十八日に国際労働者協会 (Workers' International Association) の創立大会がロンドンで開かれたが、マルクスは招かれてこれに出席し、創立宣言および規約を起草した。「大会は窒息するほどぎっしりつまっていた(それはいま明らかに労働者階級の復活が起こりつつあるからだ)。……総務委員会〔後日開かれた〕の席で僕の宣言 (Address) その他は大きな感激をもって採択された(全会一致で)」(一八六四年十一月四日付マルクスからエンゲルスへの手紙)、——「われわれがふたたび、すくなくとも彼らの階級を代表している人々と結びついたことはいいことだ。それは窮極においてともかく主要なことだ」(同十一月七日付エンゲルスからマルクスへの手紙)。そしてマルクス『資本論』完成という本来の仕事のための時間がさかれるのをかこちながらも、この国際労働者協会(第一インターナショナル)の発展のためにこのあと数年の間——一八七〇年にエンゲルスがロンドンに転居してこの仕事を助けるまで——エネルギーの一半を傾けることとなった。

なお、一八六二年春『トリビュン』の編集者デーナの退社とともに、一八五二年八月からつづいたマルクスとトリビュンとの関係は切れることとなった(一八六二年三月十五日付および四月二十八日付マルクスからエンゲルスへの手紙、同年五月五日付エンゲルスからマルクスへの手紙、同五月六日付マルクスからエンゲルスへの手紙参照)。それで、一八五七年恐慌のばあいには『トリビュン』への論説のなかに当時の経済情勢、経済循環にかんする記述を多く見ることができたが、一八六〇年代のばあいには関係する『トリビュン』の論説はこの期のはじめのころに書かれた二、三のものがあるにすぎない。またマルクスはのちに見るように一八六一年秋から『ウィーン・プレッセ』に寄稿したが、これも

翌一八六二年の末ごろまでしかつづかなかった。またマルクス、エンゲルスの『往復書簡』もこの一八六六年恐慌の所在する期間には前の時期のように当時の経済情勢、経済循環について記している通信は多くない。しかしまたこの期には綿花問題が直接、マンチェスターでエンゲルスが携わっていた商会の経営に大きく触れて来たので、エンゲルスからマルクスへの個人的な身辺通信のなかにも当時の状況が窺われるものが散見される。かつまた、右のように『資本論』第三巻がそれから編集された草稿および第一巻はこの期に書かれたものであるため、これらのなかには当時の事情が、『工場検査官報告書』からの引用その他の形で例証としてとくに多く用いられている。本稿ではこの『資本論』のなかからもそうした関係するいくつかを拾っておくこととする。なお初版の印刷用原稿が書かれたのは一八六七年三月どまりであるが、その第一巻は第二版が一八七二年七月から一八七三年一月の間に——分冊の形で、のちに合本として——刊行され、またこれと並んでフランス語版第一巻が一八七二年八月から一八七五年五月にかけて刊行され、また一八八三年にはドイツ語第三版がマルクスの指示にもとづく増訂を入れてエンゲルスの手によって刊行された。これが現行第一巻であるが、このなかには一八六七年三月以後にわたる記述が若干つけ加えられている。一八六六年恐慌は一八六七年三月のあとにも及んだのであって、そうした一八六七年三月以後についての記述もしたがって——わずかながらではあるが——現行第一巻から見ることができる。

(3) マルクスは一八六〇年二月、フォークトの書いたパンフレット『アルゲマイネ・ツァイトゥングにたいする私の訴訟 (Mein Prozeß gegen die Allgemeine Zeitung)』から長文の抜き書きをしてマルクスを誹謗する社説を掲げた『ナショナル・ツァイトゥング (Nationalzeitung)』紙にたいして訴訟をおこすとともに、別に文書を刊行してフォークトを反駁、攻撃することとし、この訴訟は同年十月プロイセンの法廷で却下と決定されたが、論駁書の方は同年十一月末ロンドンの書店ペッシ (Petch) から自費出版で『フォークト氏 (Herr Vogt)』として出版された。エンゲルスはこの一八六〇年一月末マ

ルクスへの手紙において、フォークトはきびしくやつけられねばならぬことはもちろんだが、「君の第二冊が早く出ることの方がはるかに一番大事なことだ。だから君がフォークトの事のためにその仕事をつづけるのを妨げられないようにしてほしい」と書き（一八六〇年一月三十日付の手紙）、またマルクスもこれにたいして、「ともかく（僕は神および世界にたいして誓った）、訴訟のために必要な材料の調達以外には、僕の『資本論（Kapital）』を完成させる。僕はそう決心しているから、六週間中にそれはでき上る、そして訴訟のちにもつづくだらう（このころマルクスはまだ「資本一般」を書き終えてのちそのつづきを書くつもりであった）」（一八六〇年二月三日付エンゲルスへの手紙）と書いていたが、しかしじっさいにはこの一八六〇年には「経済学批判」の仕事はあまり進捗しなかったらしい。

つぎに年代を追って見てゆくこととしよう。

二

一八六〇年一月二十六日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「インドではあらたな恐慌が準備されている。それについての当地の俗人たちの見解がどうであるかは、同封の市場報告書を見られたい。多くの綿糸がいまきわめて高値であつて、最高値ではほとんど一八五七年よりも高いくらいだ。しかも綿花は二ペンス $\frac{3}{4}$ から二ペンス $\frac{1}{2}$ 方安い。パーンレーにおいてだけでも二十六の新工場が建築中であり、他のところでも同じ程度だ、労働者はいたるところで賃銀の値上りがしだいに一〇パーセントになってきており、まもなくもっと受取ることになるだろう。僕の見るところでは、インド取引での仮空資本をもつてする行動はじつにふたたび一八四六—四七年と同じように蔓延しており、大ていの人々はただ買わねばならぬために、そして停止することができないために買っているのだ。⁽⁴⁾だがそういうことがなくても、生産の増加だけからしてもこの秋、遅くとも一八六一年の春までには、大規模な崩壊（collapse）

がやってくるだろう」(傍点―三宅)。マルクスもまた当時過剰生産恐慌が近づいていると見ていたようであって、エンゲルスへの手紙のなかにつぎのように記しているところがある、「……恐慌が目前にある現在 (Jetzt, wo Krisis bevorsteht)」、ロシア王の死がまもなくである現在」云々(一八六〇年二月三日付の手紙。ちなみに、恐慌は来なかったが、ロシア王の方はこの年の末に死んだ)。

(4) 「ここではもはや、商品が買われたから手形が振出されたのではなくて、割引されうる、貨幣に換えられうる手形を振出しうるために商品が買われた」(『資本論』Bd. III, S. 447. 長谷部訳、青木版五八二ページ。) ここでは一八四七年恐慌のさいの東インド取引のことが例証とされている。

マルクスは一八六〇年六月二十五日付エンゲルスへの手紙のなかで、「君がもし金曜日か土曜日までにイギリスの国防か、ガリバルデイか、インド貿易かにかんして (über den indischen trade) 『トリビュン』のために一論説を書いてくれるとありがたいのだが」と頼んでいる。右のようにエンゲルスはこの年一月にインド取引、イギリスでの生産拡張から、恐慌が近づきつつあることを述べていたが、このマルクスの依頼にたいしては「インド貿易にかんしては (über den indischen Handel) 一論説を書くほど僕は知っていない」という返事を書いている (同六月二十六日付マルクスへの手紙)。リュールルの Bibliographie では『トリビュン』一八六〇年七月十六日号所載のマルクスの論説として British Commerce という題名を掲げ、これはロシア語版全集第十二巻第二分冊に収められているとしている (Supplément, p. 51)。また大月選集の「著作年表」ではこれを「イギリスの貿易」として、七月はじめ執筆としている (一二五ページ)。このロシア語版からの邦訳は出されていない。ともかくこれによって見ると、エンゲルスが引受けなくて——イギリスの国防、ガリバルデイの方はすこしあとになってからであるがエンゲルスが

書いているが——けっきょくマルクスが書くこととしたのであろう。

このあとマルクスは既掲のように一八六〇年四月の『工場検査官報告書』を扱った『トリビュン』一八六〇年八月七日号および二十四号所載の論説「イギリス工場工業の状態 (The State of British Manufacturing Industry)」(執筆日付七月十日、十四日。大月選集訳、第九卷、二〇五—二二二ページ)を書いており、また大月選集の「著作年表」によると執筆日付一八六〇年七月二十八日、『トリビュン』八月十一日号所載の「イギリスの貿易状態」という論説を書いているが(二二五—二六ページ)、これはリュール(Bühl)の Bibliographie にはしるされていない。

一八六〇年八月二十七日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「マンチェスターの商売はどんな具合ですか？ インドは？ 国内市場は？」。エンゲルスのこれにたいする返書は、あったのなかったのかともかく『往復書簡』に残されていないが、大月選集の「著作年表」にもまたリュールの Bibliographie にも執筆日付一八六〇年九月八日、『トリビュン』九月二十九日号所載のマルクスの論説として British Commerce という題名が掲げられている(大月選集、二二六ページ、Bibliographie, p. 153)。やむの『トリビュン』八月十一日号所載のものも、この九月二十八日号所載のものも、ともに前の七月十六日号所載のものと同じがってロシア語版全集にも収められていないらしい。

(5) 一八六〇年四月の『工場検査官報告書』を扱ったこの『トリビュン』論説で書いている事柄のなかのいくつかは『資本論』のなかでも一八六〇年四月の『報告書』ではこういつているとして掲げられている。たとえば、大月選集訳第九卷二〇八ページで児童賃銀について述べているのと同じことが『資本論』第一卷 S. 279—80 の Footnote 110 (長谷部訳、青木版四六三ページ)で『報告書』から引用されており、また選集二〇八—九ページで一八三九年と一八五九年との賃銀を比較してみると十時間労働がとられているところでは賃銀はすくなくとも名目的には上がったが、労働時間が無制限のところでは低下したと述べているが、同じことが S. 573 (訳八五七ページ)でもしるされている。また選集二九—三〇ページで繊維工業の拡張

張、原料不足について述べているのと同じことが第三卷——前に「一八五七年恐慌」で掲げておいたところであるが S. 151 (長谷部訳、青木版二〇三ページ)で『報告書』から引用されている。

なお真摯な工場検査官として活動し、「イギリスの労働者階級のために不朽の功績をあげた」(『資本論』、Bd. I, S. 233, 長谷部訳、青木版三九六ページ)レナード・ホーナーはこの一八六〇年四月の『報告書』に先立って引退したが、マルクスはこの引退についてエンゲルスにこう書いている、——「レナード・ホーナーがその地位を退いた。彼の最後の短い報告 (Rapport) は皮肉な辛辣さに満ちたものだ。君は、マンチェスターの工場主たちがこの引退に手を下して関係していたかどうか聞込むことはできないか？」と(一八六〇年一月十一日付の手紙)。マルクスは一八五八年十月の『工場検査官報告書』を扱った既掲の論説「イギリス工場工業の状態」(『トリビュン』一八五九年三月十五日号、三月二十四日号掲載)の冒頭のところで、『報告書』が工場法違反事例の急激な増加を指摘し、法律を改正してこれを阻止することが必要だといっていることについて論評を加えるとともに、かかる工場検査官たちについて「深甚な尊敬をささげる」としているが(大月選集訳、第九卷、一七一―二ページ)、『資本論』第一巻でもホーナーの「現在盛んに行なわれるようになってきている違法労働を検査官が防止しうるように工場法を改正するための提案」(一八五九年八月)をメンションしている(S. 308-9, 長谷部訳、青木版五〇三ページ)。

イングランド銀行のバンク・レートは前記のように一八五八年の春から約二年間低位をつづけた。そして一八六〇年に入っても、レートはすこし上がったがなおまだ比較的低い水準を保ち、市場はだいたいにおいて平穩に推移していた。だが一八六〇年末ごろからこのバンク・レートの動きは変化してきた。すなわちレートは十一月八日に四パーセントから四パーセント半に引上げられ、同月十三日に五パーセント、同月十五日に六パーセントと急速に五パーセント以上に引上げられ、同月二十九日には五パーセントに戻ったが、十二月三十一日にはふたたび六パーセントとなり、翌一八六一年に入ると、これは一月七日にさらに七パーセント、そして二月十四日には八パーセントというこれまで恐慌時にしか見られなかった高さにまでなった。マルクスはこの一八六〇年末に『トリビュン』に「貨幣逼迫」

「(A Money Stringency)」という論説を寄せ『トリビュン』一八六〇年十一月二十日号所載、執筆日付十一月十日——したがって右の引上げがはじまったばかりのときである——、大月選集訳、「大ブリテン—金融市場の緊迫状態」、第九卷、八四—六ページ)、そこでつぎのように述べている。

「すでにずっと以前に予言されたこと——正貨の流出とそれに関連した割引歩合の引上げとがはじまった。昨日イングランド銀行は、割引歩合を四パーセントから四パーセント $\frac{1}{2}$ に引上げた〔「昨日」というと十一月九日ということになる〕。……同行のはっきりした目的は、その地下室から正貨が流出するのを阻止することにあつた。……ばく大な穀物輸入は、もちろん、おそかれはやかれ貴金屬の流出をもたらさなければならぬが、しかし穀物の支払手形はまだ満期になっていないのであるから、現在見られる流出はこれによつては説明できない。そればかりでなく、ロンドンの割引歩合がバリ、アムステルダム、ブラッセル、およびハンブルグよりも高い……というそのときに、この流出がおこっているのである。このようなときに、いったい金はどこへ出てゆくのか？ フランス銀行の地下室へである。フランス銀行は……その割引歩合は現在三パーセントにすぎない。ところで他方、同行の割引取引は八、九月の間にはとんど三百万ポンド増加した。こういう事情のもとではどんな普通の銀行でも割引歩合を引上げたであらうが、ルイ・ボナパルトは金融市場に予期される混乱をひきおこすことを恐れるあまり、損をして金を買上げることを同行に命じ、商業的には疑いもなく不利益なこの取引をむりやり同行につづけさせているのである〔損をして金を買上げるといふのはプレミアムを払って買入れるという意味であらう。既掲の『トリビュン』一八五八年三月十二日号所載の論説「フランスの経済恐慌」参照〕。他方では、イングランド銀行は、こんにちおこっている流出を利子率の引上げによつて阻止することはできない、ということを証明した。……イングランド銀行の公定割引歩合の引上げは、とりわけもしそれがつづけら

れるならば、いうまでもなくフランス銀行にこれと同じ方向に進むことを余儀なくさせ、そしてこのようにして、ルイ・ボナパルトが同行の理事にたいして金融市場の明らかな混乱を蔽いかくすために同行が損をしても金を買上げよという命令をいままでもどおり発するのを妨げるであろう。だが、イギリスからの正貨の流出は、こうした強いられた方策によって阻止されないであろう。というのは、しかるべきときに穀物手形の支払期間が満期になり、支払は現金でしなければならなくなるからである」(6)(傍点—三宅)

見られるようにここでマルクスは、バンク・レートの引上げは金流出を阻止するためであるが、この金流出はフランス銀行が金をプレミアム付で買入れているために生じているものであり、また「ぼく大な穀物輸入」が行なわれたのでそのうちこの穀物手形が満期となることによる金流出が避けがたく生じると観察している。

だがクラパムはつぎのように述べている、——「一八六〇年末におけるバンク・レートの上昇は事業活動に原因があったものでもなく、また収穫不良に原因したものでもなく——収穫は一八五七年以来豊作ないし良作であった (good or fair)——、アメリカでの戦争の危惧からきたものであった。ミシシッピイ、フロリダ、アラバマ、ジョージア、ルイジアナ、およびテキサス——いずれも綿花州——が一八六一年一月に連邦から脱退したさいに、バンク・レートは一時八パーセントまで上がった。金はインドへ向ける銀を買うために引出されていった。そしてインドの銀要求は、アメリカからの綿花供給が杜絶するだろうと憶測した人たちによる綿花の『気ちがいじみた注文 (wild orders)』(『エコノミスト』、一八六一年二月九日)に因るものといわれていた。だがじっさいに杜絶したのはもっとずっとあとのことであった。一八六一年の英米貿易は、アメリカ人がまだ時日のあるかぎりさかんに売ろうとしたのでアメリカの財貨輸出〔綿花等の〕が激増し、そしてイギリスのアメリカへの輸出は減退したので、金は東へ代って西

へ動いた」(Economic History of Modern Britain, vol. II, p. 372—3. また Bank of England, vol. II, p. 256—7, でも同様)。つまりクラバムは、一八六〇年末から一八六一年春にかけてのイングランド銀行のバンク・レートの昂騰はアメリカでの南北の対立激化、この激化からイギリスの綿花輸入が杜絶することを惧れた買付け投機によるものであったと説明し、かつ「收穫不良 (failed harvest) に原因したものではなく、收穫は一八五七年以来豊作ないし良作であった」と述べているのである。

もし收穫がこのようなであったならば、「ばく大な穀物輸入」が行なわれたので近々この穀物手形が満期となることによる金流出が避けがたいとしているマルクスの右の觀察は、すくなくとも事実を誤認していたことになる。だがさきによちよと見たように、J・R・T・ヒューズは一八六〇年について「收穫は不良であった (the harvest failed)」とし、イングランド銀行の準備金は「主として穀物の大量輸入のために (largely because of a heavy import of corn)」減少したと記している (Fluctuations, p. 30)。ヒューズはまた同書の別の箇所で一八五〇—六〇年間に於ける「收穫不良 (harvest failure)」の年の例として一八六〇年を一八五三年とともに挙げてつぎのように述べている、——「收穫が乏しいときはいつでもこれについて物価騰貴と輸入増大が生じており、そして一八五三年の收穫不良はこれにつづいて金融逼迫と貿易減少が生じた。だが戦争「クリミア戦争が一八五四年三月におきた」とオーストリア市場の崩壊もまたこれらの困難を助長した。一八六〇年にも同様な收穫不良が生じ、これにつづいて大きな輸入、金融逼迫、および一八六一年の不況が生じた。だがまたもこれらは戦争「前記のように南北戦争が一八六一年四月にはじまった」および一大外国市場たるアメリカ合衆国の沈下と結びついた」と (Ibid. p. 64)。さらに同書の掲げている統計表 (Table 20, p. 61) によると、輸入穀物価額 (単位百万ポンド) は一八五〇年一三・一、五一年一六・一、五二年

一三・五、五三年二・四、五四年二一・八、五五年一七・五、五六年二三・〇、五七年一九・三、五八年二〇・一、五九年一八・〇、これにたいして一八六〇年は三・七であった。またイギリスの小麦收穫状況（一エーカー当り二ハブツシエル＝一〇〇）は一八五〇年一〇二、五一年一一〇、五二年七九、五三年七一、五四年一二七、五五年九六、五六年九六、五七年一二四、五八年一一六、五九年九二、そしてこれにたいして一八六〇年は七八とされている。

これらによって見ると、一八六〇年の收穫は不良であり、そしてこれを補填するために「ばく大な穀物輸入」が行なわれたことはたしかであった、と見てさしつかえないであろう。すなわち、この点、一八六〇年末からのバンク・レートの上昇を收穫には関係がない、收穫は良好であったとしているクラバムの記述は事実を誤っているものであり、マルクスの記述はこのかぎりにおいてまちがいはなかった、と見てよいであろう。そして、マルクスの右論説は前記のようにバンク・レートが四パーセント $\frac{1}{2}$ に引上げられた一八六〇年十一月上旬のものであり、翌年春に八パーセントまで昂騰していった過程のまだはじまったばかりのときであったわけであるが、その後マルクスの予想していた輸入穀物代金の支払いからきた金流出があったばかりでなく、綿花の買付け投機による金流出がこれにまして大きく加わり、かくして一月の七パーセント、二月の八パーセントといった引上げが生じることとなったのであろう、と考えられる。なおマルクスはさきのように十一月上旬に、金流出はフランス銀行が金をプレミアム付で買入れているために生じたものであり、「いったい金はどこへ出てゆくのかフランス銀行の地下室へである」と述べているが、インド綿の買付け投機において、さきのクラバムのいっている「金はインドへ向ける銀を買うために引出されていった」ばあいでも、イングランド銀行から引出された金は銀と引きかえに「フランス銀行の地下室」に入ることになったのであつて、したがってマルクスがいつている金流出がはたしてフランス銀行による金のプレミアム付買入れ――

これは当時のフランスの「金銀複本位制」の困難から生じたものであろう——によるものであったか、あるいはイギリスの投機業者がインドから綿花を買うために必要とする銀を入手するためであったかは、イギリスから出た金が「フランス銀行の地下室」に入つたということだけからはどちらともいえないことに属する。⁽⁸⁾

(6) 「僕はここ数週間に『トリビュン』にあらゆる可能な問題について書いた。主としてワルシャワ會議、ポーランドの状態、イタリー、フランス、および貨幣市場について。シナについてはまだなにも書いていない」(一八六〇年十一月二十三日付マルクスからエンゲルスへの手紙、傍点—三宅)。

(7) イギリスの木綿工業にとって綿花がじつさいにひどく供給不足となつた一八六三年秋ふたたびバンク・レートの急激な引上げが採られたが、そのさいのことについてであるが、こう書かれている、——「供給をつくり出すべく、世界中にわたつて探し求められねばならなかつた。東インドから、エジプトから、ブラジルから、またその他の地域から、ばく大な量が入つてきた。このきわめて大きな取引はとつぜんにつくり出されたもので、現金をもつて支払わねばならなかつた。その結果銀の一大流出が東へ向つてはじまつたが、この銀は、ロンドンが金の大中心地であるのと同様に銀の大中心地であるパリおよびハンブルグから取得された」(MacLeod: Theory and Practice of Banking, vol. II, p. 156)。

(3) なお、マルクスはこの翌一八六一年十一月にエンゲルスに宛て「ずっと前からしばしばトリビュンで僕が予告していた十二月党の財政制度(Finanzsystem)」「一八五一年十二月にクーデターによって第二帝政をうち立てたルイ・ボナパルトの財政金融制度」の失敗「云々と記しているが(十一月十八日付の手紙)、このころまた『プレッセ』に「フランスの金融状態(Die Finanzlage Frankreichs)」という論説を寄せている(『プレッセ』一八六一年十一月二十三日号所載、執筆日付十一月十九日、ロシア語版全集第十二卷第二分冊所収)。

三

一八六〇年末から上がりはじめ一八六一年二月十四日には八パーセントという恐慌時的高さにまで引上られたバン

ク・レートは、このあと、三月には七パーセント、四月には六パーセントと下がってゆき、八月には四パーセント、そして九月十九日には三パーセント $\frac{1}{2}$ となり、年末から翌一八六二年を通じ三パーセントないし二パーセントという低さを保った。「金の動きはたやすく調整され、バンク・レートはこの年（「一八六一年」）の後半を通じて低落していった。そして一八六二年は年間を通じてきわめて低位を保った」（Clapham; Economic History, vol. II, p. 373）。「一八六二年は一八五二年以来のもつても金利の低い年となり、バンク・トートは七月後半から十月まで二パーセントであった」（Clapham; Bank of England, vol. II, p. 257）。

マルクスは『トリビュン』一八六一年十月十四日号所載の論説「イギリスの綿花貿易(The British Cotton Trade)」(執筆日付九月二十一日。大月選集訳、補巻Ⅰ、二二一―二六ページ)において、南北戦争がイギリスの綿花供給にたいして及ぼしつつある影響について述べている。マルクスはまた、一八六一年秋から Wiener Presse に寄稿することとなったがその最初の論説の一つとして書いた「イギリスの危機 (Die Krise in England)」において、『プレッセ』一八六一年十一月六日号所載、執筆日付は大月選集の「著作年表」によると同年十月十五日―二十日ごろ。林要訳、改造社版マル・エン全集第七巻ノ三、七一―四ページ、大月選集訳、補巻Ⅰ、一〇五―九ページ)、同じく南北戦争のイギリスへの綿花供給にたいする影響について、『トリビュン』に寄せた右の論説とはほぼ同じ内容のことを――これははじめの方を除いてはだいたい右の『トリビュン』論説の改作である――述べている。マルクスはまた『プレッセ』にこれにひきつづいて「経済ノート (Volkswirtschaftliche Glossen)」なる論説を寄せているが(『プレッセ』一八六一年十一月八日号所載、執筆日付十一月三日。大月選集訳、補巻Ⅰ、一一〇―四ページ)、そこではフランスの経済情勢、イギリスの綿花投機、イギリスの輸出入などについてしるしている。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾

(6) リーベンの Bibliographie では The British Cotton Trade という題目を掲げ、「In: NYT, 14 octobre et 23 novembre 1861. Datés du 21 septembre et du 2 novembre 1861」としてゐる (p. 155)。大月選集の「著作年表」では上の「イギリスの綿花貿易」と別にして、執筆日付一八六一年十一月二日、『トリビュン』十一月二十三日号所載のものとして「イギリスの貿易」という論説名を掲げてゐる (二二八ページ)。

(10) リューベルの Bibliographie では Die Krise in England u Volkswirtschaftliche Glossen とを一つの項下に掲げ、Der Kampf の一九三二年三月一日号に収められてゐるとしてゐるが (p. 156)、『カンフ』に収められてゐるのは——改造社全集版訳の底本はそれであるが——前者だけらしい。

(11) このころマルクスはエンゲルスに過ぎのような手紙を書いている、——「マンチェスター『ガーディアン』(これは僕にとつてとくに現在きわめて有用なのだ) およびブリティッシュ・アソシエーション「コットン・サプライ・アソシエーションのこと?」の刊行物どうもありがとう」(一八六一年九月二十八日付)、「できるかぎりくわしくマンチェスターの状態について知らせてくれることを忘れないでくれたまえ」(一八六一年十月三十日付)。

(12) ウィーンの『ウィーンナー・プレッセ (Wiener Presse)』からは以前にも一八五七年末と一八五九年春との両度、ラッサールを介してマルクスに寄稿の話をしてきたことがあったが、はじめのときは同紙は政治物を求めてき、そしてマルクスは同紙の親バーマストンの傾向を嫌つてこれを断わり——「もし奴っこさんたち『プレッセ』の編集者マックス・フリードレンダーたち」がたんなる一週間ごとの金融論説 (Moneyarticle) を僕に望むなら——もちろんそのさいそれについて支払つてくれねばならないが——、もしかすると話に乗ることができたかもしれないが、政治物はいまのばあい問題になりえない」(一八五七年十二月二十二日付マルクスからエンゲルスへの手紙)——、また二度目のときは報酬のことで話が纏らなかつた(一八五九年五月六日付マルクスからエンゲルスへの手紙)。なおマックス・フリードレンダー (Max Friedländer) は、既述のようにマルクスは一八五四年末から一年ほどの間『ノイエ・オーデル・ツァイトゥング』にロンドン通信員となつて寄稿してゐたが、そのさいの同紙の所有者の一人であつて、ラッサールの従兄弟であり、マルクスが『ノイエ・オーデル・ツァイトゥング』の通信員となつたのも当時マルクスがラッサールにドイツで文筆上の仕事を見付けてほしいと求め、それでラッサールが斡旋したものであつた(一八五四年十二月二日付マルクスからエンゲルスへの手紙)。

だがマルクスは一八六一年四月にドイツに行つたさい、人を介して『プレッセ』と関係を結ぼうとし——「……ベルリンで

は必要ならば『ウィーンナー、ブレッセ』と關係を結ぶことができる道をつけておいた。現在のアメリカの状態からするとおそらくその必要は避けがたくなるだろう。最後に、ラッサールを介して、僕の経済学の第二部 (der zweite Teil meiner politischen Ökonomie) はドゥンケルのところではなくブロックハウス (Brockhaus) のところから出るように準備してきただ」(一八六一年五月七日付マルクスからエンゲルスへの手紙)——、そして同年六月フリードレンダーから二つの論文を見本として送ってくれという依頼を受取り、またそこで示された支払条件を承諾することにした。「今日ウィーンから手紙を取った。フリードレンダーは僕にさし当り二つの論文を要求してきた。一つはアメリカの出来事にかんするもの(そこでは政治上、軍事上のいっさいを一つないし二つの社説になるように纏めねばならない)、一つはイギリスの状態についてのもの。このあとで(つまりこの論文を受取ったのち)彼はくわしい提案をするそうだが、各論文にたいして一ポンド、またたんなる通信にたいしては一〇シリング受取ることになっている。これはドイツの標準ではいい支払いだ。そして、暮してゆかねばならぬから、僕は話しに乘らねばならない。僕は喜んで今週中に二つの見本論文 (Probearbeiten) を送りたいから、君はアメリカにかんする軍事上の部分を整理してくれないか。そうすれば僕はそれを政治上のものなかに組入れよう」(一八六一年六月十日付マルクスからエンゲルスへの手紙)。エンゲルスはすぐに六月十二日付の手紙でマルクスにアメリカの南北の軍事的状況について書き、そのあとこの南北の政治的、軍事的状況について二、三の手紙の往復があった。しかし論文は「今週中」には送られないで、この年の十月になってから書送られた。——「君も知つてのように僕は前にマンチエスターからウィーンの『ブレッセ』に宛てて『照会』を書いたが(この年八月から九月かけてマルクスはマンチエスターのエンゲルスのところに滞在していた)、約三週間ほど前に返事を受取った。……同時にフリードレンダーは(彼の持主の強制で)二つの見本論文を要求してきた。それをこんどは送ったところ、昨日の朝、一、論文は新聞の上欄に適當な紹介をつけて掲載した、二、十一月から一論文につき一ポンド、一通信につき一〇シリングで正式に契約する、という返事を受取った」(一八六一年十月三十日付マルクスからエンゲルスへの手紙)。

上の「イギリスの危機」や「経済ノート」は、マルクスがこうして『ブレッセ』に寄稿しはじめたころの論説である。なお、マルクスが『ブレッセ』に寄稿しはじめたころの論説としては「北アメリカの内戦 (Der nordamerikanische Bürgerkrieg)」(一八六一年十月二十五日号)、「合衆国の内戦 (Der Bürgerkrieg in den Vereinigten Staaten)」(十一月七日号)、「イギリスの危機」(十一月六日号)、「経済ノート」(十一月八日号)などがあるが、これらのうちどれが右の「見

本論文」であつたのであらうか。モスクワの M・E・L 研究所編『マルクス年譜 (Karl Marx. Chronik seines Lebens in Einzeldaten)』一九三四年刊では「十月十五日頃—二十日」として「『ブレッセ』紙に送る二つの見本論文「北アメリカの内戦」、「合衆国の内戦」を書く」と記しているが(岡崎次郎、渡辺寛訳、青木書店刊、二六九ページ)、大月選集の「著作年表」によると上のうち「北アメリカの内戦」と「イギリスの危機」とが十月十五日頃—二十日の執筆とされており、「合衆国の内戦」の方の執筆日付は十月三十一日頃とされている(二二八ページ)。加えて、二つの見本論文のうち「一つはアメリカでの出来事にかんするもの」、「一つはイギリスの状態についてのもの」というさきの「一八六一年六月のときに『ブレッセ』の出していた注文を考慮すると、また「北アメリカの内戦」の末尾は「われわれはつぎの論文で……ロンドンの新聞の主張を検討することにしよう」と書かれている(大月選集訳、補巻Ⅰ、八九ページ)ことから見て、「見本論文」として書かれたものは「北アメリカの内戦」——これは論説の末尾に十月二十日という執筆日付が入っている——と「イギリスの危機」の二つであつたのではなからうかと推測される。そして、とすれば、これを書いたのちひきつづいて「北アメリカの内戦」のつづきとして「合衆国の内戦」を十月三十一日ごろ書き、また「経済ノート」を「イギリスの危機」のつづきとして十一月三日に——この執筆日付も論説の末尾に付されている——書いたのであらう。いずれにしても大したことではないが備忘としてしるしておく。(なおこれらの論文は大月選集補巻Ⅰに、その他の南北戦争関係のマルクス、エンゲルスの論文、通信、往復書簡とともに訳出されている。この補巻Ⅰの底本となっているのはマルクス、エンゲルスの南北戦争関係のものを集めた The Civil War in the United States by Karl Marx and Friedrich Engels, edited by Richard Emale, New York, International Publishers, 1937 であらう)。

マルクスは一八六一年九月中旬、マンチェスターから帰ってまもなく、前年末以来関係とぎれていた『トリビュン』に週一回の寄稿をふたたびはじめて『トリビュン』の出方を打診した(一八六一年九月二十八日付マルクスからエンゲルスへの手紙および右の一八六一年十月三十日付の手紙)。上の『トリビュン』所載論説「イギリスの綿花貿易」はこのとき送った論説の一つであつて、執筆日付のうえでは『ブレッセ』所載の「イギリスの危機」の方がこの「イギリスの綿花貿易」を改作した形になっているが、「イギリスの状態にかんする」見本論文として『ブレッセ』に予定していたものを『トリビュン』に使うこととしたのであらう。

マルクスは右の一八六一年十月三十日付の手紙で、『トリビュン』へ寄稿を再開してこれが受入れられたし、また『ブレッ

セ」にあらたに寄稿をはじめることとなったので、生計の足場ができることになったと喜んでいたが——「ともかくこの二つの契約で、過去一年間の追いついて立てられていた僕の家族の生活に終止符を打つ見込みが、また書物(Buch)をこんどは完結させる(vu Ende bringen)見込みが確保された」——、しかし『トリビュン』の方は前記のように翌一八六二年春関係が切れることとなり、また『プレッセ』も送った論文のうちわずかしが掲載しなく、しかも掲載分にしか支払わないという調子であって——「こういうふうでなければ奴こそさんたちは僕にとってすくなくともある程度は『トリビュン』の代りになりうるものだったのだが」(一八六二年八月二日付マルクスからエンゲルスへの手紙)——、一八六一年十月から一八六二年十二月までにけっきょく四十三の論文が掲載されたが、この一八六二年末で『プレッセ』への寄稿をやめることになった。マルクスからエンゲルスへの手紙、一八六一年十二月九日付、十二月二十七日付、一八六二年二月二十五日付、三月六日付、四月二十八日付、六月十八日付、五月二十七日付、六月三十日付、八月二日付参照。

『トリビュン』論説「イギリスの綿花貿易」、『プレッセ』論説「イギリスの危機」ではマルクスはつぎのように述べている(傍点—三宅)。

「原綿価格の不断の昂騰は、ついに木綿工場に重大な影響を与えはじめ、その綿花の消費量はいまや完全消費量を二五パーセントも下廻っている。このような結果は、生産率が日一日と低下しているためにおこったものであって、一週間に四日ないし三日しか操業していない工場はたくさんあり、……この操業時間短縮の動きはまだほんのはじまったばかりの状態であるが、われわれは、数週間後には木綿工業は一般的に一週三日制になり、同時に大多数の工場で大々的に機械がとめられるようになる、と完全な自信をもって予言できる」(『トリビュン』)。すなわちまず、綿花価格の騰貴がイギリスの木綿工業に大幅の操業短縮という影響を与えはじめている、と。南北戦争がはじまったのは前記のように一八六一年の四月であるが、ではこれまで——右の論説を書いているのは一八六一年九月下旬—十月中旬であるが——はどうであったか。それについてマルクスはこう述べている。

「アメリカの内戦の開始以来、綿花の価格はひきつづいて上昇した。しかしながら、相当期間というものは、予期したほどの上昇をみなかった。だいたいいにおいてイギリスの商業界はこのアメリカの危機をのんきに見おろしていたように思われる。このように事態を冷淡に眺めた原因ははっきりしている。前年のアメリカの収穫（つまり一八六〇年の収穫）の全部がとうにヨーロッパに来ていたからである。新収穫は十一月末をすぎなければ積出されないし、この積出しも十二月末までは相当量に達することはめつたにないのである。『積出期は十一月末にならなければはじまらず、ふつう十二月にならなければ大量の輸出は見られない』（『トリビュン』）。だから、そのときまでは、綿花の俵がプランテーションにとめておかれようと、それとも荷づくりされると同時に南部の諸港に送り出されようと、そんなことはたいした問題ではなかった。もしも封鎖が年末以前のいつか中止されるならば、イギリスはまるで封鎖などなかったかのように、四月か三月には例年の綿花輸入を受けるものと安心して期待できたのである」（『ブレッセ』。『トリビュン』の方でも「イギリスの製造業者や商人」はこういつていたとして、上とはほぼ同じことがしるされている）。すなわち、一八六〇年秋に収穫された綿花はすでに輸入済みであるし、一八六一年秋収穫の綿花はまだ積出期に入っていない、だから年末までに封鎖が解かれるならば、ほとんど変りがないということから、綿花の価格騰貴はそれほど大したものとはなっていない、イギリスの木綿工業はさした影響をまだ受けるにいたっていないかった、というのである。ではいまここでなぜ変化が生じたのであるか。右につづけてマルクスはこう記している。

「イギリスの新聞によってはなはだしくまちがった考えを抱かせられていたイギリス商業界は、たぶん六カ月もはなばなしい戦争がつづけば、合衆国による南部連合の承認ということだけでけりがつくだろうという謬見に服していた。しかし、八月の末になって、北アメリカ人が一部はヨーロッパで投機をするため、一部は北アメリカに積み戻すため、

綿花を買付けようとしてリバプールの市場に現われた。この未聞の事件がイギリス人の目を開かせ、彼らは事態の重大性を理解しはじめた。以来、リバプールの綿花市場は熱病的興奮状態にあり、綿花の価格はまもなくその平均価格を一〇〇パーセント上廻り、綿花投機は一八四五年の鉄道投機に見られたと同じ狂気の様相を呈した。ランカシアその他のイギリス木綿工業の中心地における紡績、織物工場は、操業時間を三日に短縮し、一部の工場はまったく機械の運転を停止した。「九月に書かれた『トリビュン』では前掲のように数週間後には木綿工業は一般的に一週三日制となることが予言できると記していたが、十月のこの『ブレッセ』では上のように記している」。——かくして全イギリスは現在前代未聞の最大の経済的破局の接近を前にして、戦慄している」（『ブレッセ』）。すなわち、八月末に北部アメリカの人々によるリバプールでの買いが現われたことによって、封鎖についてのいままでの甘い考えが破れ、かくして綿花市場で熱狂的な買いがはじまって価格がはげしく騰貴し、また操業短縮がはじまってきた、というわけである。

このリバプール市場での熱狂的な買いと綿花の値上がりについて、九月二十一日付で書いた『トリビュン』の方ではこう記している、「その結果〔甘い考えが崩れ去ってしまった結果〕、この二週間、リバプール市場は熱狂的な活気を呈している。リバプール商人の綿花の思惑買いが、冬季のための原料ストックを入手しようと懸命になっているマンチエスターその他の製造業者の思惑買いによって輪をかけられているからである。マンチエスターその他の製造業者がどのくらい取引をおこなったかは、マンチエスターの予備倉庫の大部分がこのようなストックですでに充滿しており、九月十五日にはじまって二十二日〔執筆日付の二十一日であろう〕におわる一週間にミドリング・アメリカンズが一封度当り八分の三ペンス、中等品〔？ ミドリングⅡ中等品であるからここはちょっとわからない〕は八分の五ペンスがた値上りしたという事実が、これを十分に物語っている」と。そして綿花はその後値上りをつづけ、十月中旬に

『ブレッツセ』に書いたところはさきのように「平均価格〔だいたい六ペンスというところを指しているであろう〕を一〇〇パーセント上廻る」ところまでいったわけである。さきに「アメリカの内戦開始以来、綿花の価格はひきつづいて上昇した。しかしながら、相当期間というものは、予期したほどの上昇をみなかった」と述べていたが、いまリバプールの綿花価格の動きを見ると、つぎのように記録されている(W. O. Henderson; The Lancashire Cotton Famine 1861-1865, 1934, p. 122. ミドリング・オルレアンズ、一封度当り、月末値)。一八六一年一月七ペンス $\frac{3}{4}$ 、二月六ペンス $\frac{7}{8}$ 、三月七ペンス $\frac{3}{4}$ 、四月七ペンス $\frac{3}{4}$ 、五月七ペンス $\frac{7}{8}$ 、六月八ペンス、七月八ペンス $\frac{1}{2}$ 、八月九ペンス、九月一〇ペンス、十月一二ペンス。

また右の『ブレッツセ』論説のすこしあとに同紙に寄せた前記の「経済ノート」のなかでは、当時のこの熱狂的買いの様相をなおつぎのように描いている。「前に送った通信のなかで、過去数週間のリバプールにおける綿花ペテン〔投機〕は、一八四五年のもっとも気ちがいじみた鉄道マニア時代の一日を思いおこさせる、と私は指摘した。齒医者、外科医、弁護士、コック、未亡人、労働者、月給取りや貴族、喜劇役者や坊主、兵士や洋服屋、ジャーナリスト、アパートの持主、亭主も女房も、あらゆる綿花の投機をやったのである。一俵から四俵というきわめて少量の綿花が買われ、売られ、そしてまた売られた。比較的多量の品物は、その持主を二十回もかえたが、何カ月もの間同じ倉庫にあった。十時に綿花を買った者はだれでも、十一時には一封度につき半ペンスの利益でふたたび売払った〔前記の価格の動きで見ると、この描写はすこしオーバーであろう〕。このようにして同一の綿花が往々にして十時間のうちに手から手に六回もめぐり歩いた。しかしながら今週は小康状態がおとずれたが、その理由たるや、すでに一封度の綿花(すなわち中等のオルレアン綿)が一シリングに上がってしまったこと、そして十二ペンスは一シリングであり、

したがってきれのよい数字であるということ以上の理由によるものではないのだ。それでだれもが、最高値に達すると同時に、売りに出ようとした。そのために急激に供給が増加し、それにしただって反動がおこった。イギリス人が、一封度の綿花は一シリング以上に上がりうるという可能性を知るにいたるやいなや、聖ヴァイタスおどりがいままで以上に気持ちがよいじみてぶり返すであろう。この論説が書かれたのは前記のように一八六一年十一月三日であるが、さきの価格表で見ると、一八六一年十月末の一二ペンスのち、十一月末一一ペンス $\frac{1}{2}$ 、十二月末一二ペンス、そして翌一八六二年一月末には一三ペンスとなった。またこの価格はこの年八月にはさらに大幅に上昇して、八月末にはこの二倍の二六ペンス $\frac{1}{2}$ となった (ibid. p. 123)。

こうした綿花の値上がり、操業短縮にたいしてさきの『プレッセ』ではこんごの見透しについてつぎのように述べている。「インド綿の消費はどうぜん増大しており、また価格の上昇によって、この綿花の古代的故国からの輸入は確実に一そう増大するであろう。にもかかわらず、いわば二、三カ月前の予告によって、生産諸条件と貿易路とに大変革おこすことは、できない相談である。イギリスはじっさい、長い間のインド統治の失敗の罪を現在あがなっているのである。アメリカ綿をインド綿に変えようとするイギリスの現在の発作的な試みは、二つの大きな障害に遭遇している。すなわち、インドにおける通信輸送手段の欠如と、この一時的に有利な事情の利用を阻止しているインド農民の悲惨な状態である。しかしながらこのことを別にしても、〔また〕アメリカ綿にとってかわりうるためにインド綿がこれから経なければならない改良の過程はしばらく描くとしても、もっとも有利な事情におかれたとしてさえ、インドが輸出のために必要な量の綿花を生産しうるまでには何年間もかかるであろう。しかるに、四カ月もたてば、リバプールの綿花のストックが枯渇してしまふであろうということは、統計的に立証されている。これだけの期間もちこ

たえることでさえ、イギリスの木綿紡績、織物業者が、操業時間の週三日への短縮と一部機械の完全な運転休止とをこれまで以上に大規模におこなってはじめて、可能なのである。このような措置は、すでに工場地帯を最大の社会的苦痛にさらしつつある。だが、もしアメリカの封鎖が一月（一八六二年一月）以後もつづいたなら！ そのときはいったいどうなるだろうか？」⁽¹⁵⁾

(13) 同じく上の『ブレッセ』でマルクスはこう述べている、「本年産の（一八六一年秋収穫の）綿花の輸出を阻止することによって分離派の主要財源をたち切るために連邦が南部諸州の港湾を封鎖しているときに当って、南部連合は、自分の意志では一俵の綿花をも輸出せず、むしろイギリスをしてみずから南部の港に綿花を取りに来させるといふ決意をすることによって、まずこの封鎖に強力な圧力を加えている。実力で封鎖を突破し、ついで連邦に宣戦を布告し、そしてイギリスの兵力を奴隷州の味方に立たせるところまで、イギリスを追い込もうというのである」。しかしこうした南部連合の意図は実現しそうになかった。そのことについて『トリビュン』の方ではこう述べている、「これらの商人の胸裡には（すなわち前記のような綿花供給について甘い考えを抱いていたイギリスの人々においては）、アメリカの危機全体が、したがってまた封鎖が、今年の暮までには終るだろうとか、あるいはパーマストン卿が封鎖を実力をもって破るだろうという考えが潜んでいた。けれどもパーマストン卿が封鎖を破ってくれるという考えは、まったく棄てられてしまった。というのは、他のあらゆる事情とともに、北部アメリカの工業企業に巨大な資本を投下している金融資本筋と、その主要供給源を北部アメリカに頼っている穀物貿易との二大資本が互いに協力して、イギリス政府が挑発を受けないのに侵略行為に出ることを阻止しようとしている、ということをもマシチェスターが知ったからである」と。北部アメリカの人々がリバプールに綿花を買いに現われたことが「イギリス人の目を開いた」としても、これまでの甘い考えが変わったのには他にもこういうことがしだいにはっきりしてきたからでもある。

とはいえイギリスの支配層の一部はたえず南部に同調していたのであって、この論説が書かれたのちまもなく一八六一年十一月に、南部連合の使節をのせたイギリス船トレント号を北部の軍艦が停船させ、使者を逮捕した事件がおこったが、このトレント号事件のさい一時イギリスのアメリカ内戦への干渉の危機が生じた。だがマルクスは一貫してイギリスが開戦にいたることはないことを確信していた、——「最初の日に『ブレッセ』ではっきりいったように「事件のニュースがラ・プラタ号によっ

てサザンプトンに入ったのは十一月二十七日で、マルクスはこのトレント号事件について『トリビューン』にも『ブレッセ』にもいくつかの通信を書き送ったが、最初にこの翌十一月二十八日付で「トレント号事件 (Der Trentfall)」と題する通信を『ブレッセ』に送った。『ブレッセ』一八六一年十二月二日号所載、大月選集訳、補巻Ⅰ、二二六—二二七ページ「アメリカとは戦争にならないだろう。ただ、この瘋癲期間にロイターやタイムズに操られていた証券取引所の愚劣さを押し取ってやる手段をもっていなかったことが残念だ」(イギリスの証券市場はトレント号事件で一時暴落を示した)「(一八六一年十二月九日付エングルスへの手紙)。なおマルクスは『ブレッセ』への論説「フランスのいんちき報道、戦争の経済的結果」(Französischer Nachrichten-Hunbug / Oekonomische Kriegskonsequenzen)」(一八六二年一月四日号所載、執筆日付一八六一年十二月三十一日。大月選集訳、補巻Ⅰ、一五九—一六〇ページ)のなかでも、イギリスが北部と戦争に入っただけに経済的に失うものを挙げ、国費で綿業地帯全体を三カ年間養った方が綿花のために一カ年合衆国と戦争するよりもやすあがりだというリバプールの一商人の意見を掲げている。

(14) 「南部諸州からの綿花供給が欠乏してきたとき、ランカシャーがもっとも大きな確信をもって目を向けたのはインドであった」(Henderson : op. cit. p. 39)。だが——と同書は述べている——、インドから多量の綿花を求めるには、インドでの綿花栽培がアメリカの南部諸州での奴隷労働による大規模生産とまったくちがって零細な農民によって食料生産のかたわらに栽培されていたこと、品質も改良されていなかったこと、輸送手段が欠けていたこと、こうしたいろいろな困難があったとし——つまり上でマルクスが指摘しているのと同様な困難を挙げ——、「しかし、インドからの綿花の輸入は一八六〇年の五六三、〇〇〇梱から一八六三年には一、三九〇、〇〇〇梱に、また一八六六年には一、八六六、六一〇梱に増加した。品質は悪かった。『一八六二年なかばの価格急騰のため、あらゆる掃き集めの屑物や市場の残り物 (all the sweepings and refuse of the bazars) が船積みのために港に送られた』といわれている」(p. 39—40)。「インドは一八五〇年代にはランカシャーの供給源としてアメリカにつぐ第二の地であり、そして同地はアメリカの五百ないし六百万梱に匹敵する収穫をもつものと広く信じられていた。だが調査の結果は、同地で加工されているすべての綿花を含めても、二百五十万梱がインドにとっておそらくぎりぎりの数字だということを示した。価格は二倍、三倍になったが、また一八六四年にはきわめて引下げられたブリテンの綿花使用量の三分の二がインド綿であったが、東に要請されたような量を引出すことはとうとうできなかった」(Clapham : Economic History, vol. II, p. 221—2)。

「過去三十年間（一八六五年までの）に、インドの綿花生産はアメリカのそれが不足をきたしたときに増大し、そしてそのあととつげんにふたたび多かれ少かれ持続的に減退する」（『資本論』 Bd. II, S. 141-2, 長谷部訳、青木版一九三三ページ）。「量ばかりでなく必要とされる質が——たとえばアメリカ的品質の綿花がインドから——供給されるほどの、原料の現実的改良が行われるためには、長くたえずつづき、規則正しく増大する恒常的なヨーロッパの需要を必要とするであらう（インドの生産者がその郷土で置かれている経済的な諸条件はまったく度外視しても）」（同上、S. 143, 訳一九三三—四ページ）。

(15) マルクスは『ブレッセ』の論説の冒頭で「こんにちイギリスは、十五年前と同じように、その全経済制度の根本に打撃を与えようとしている破局に直面している」として、このたびの綿花の危機を一八四五、四六年のアイルランドでの馬鈴薯の凶作と対比しているが、『トリビュン』の論説の末尾でもこの両者をイギリスの近代工業が依存している「巨大な二つの軸」として対比している。馬鈴薯——「アイルランドとイギリスの労働者階級の大部の唯一の食料」——の凶作の結果はイギリスの土地貴族が譲歩を余儀なくされ、「穀物法の廃止によって、数百万の労働者の再生産と維持のためのより広汎な、より健全な基礎が確保された」が、綿花——「イングランドとスコットランドでは四百万以上の人々が、直接間接に木綿工業によって生活している」のであり、これは一八六一年の国勢調査でのスコットランドの人口より多く、アイルランドの人口の三分の二以上である——のこのたびの危機は「イギリス工業にたいしてその供給地を拡大し、また奴隷を生産し奴隷を消費する寡頭支配階級の手から綿花を解放することを、強要している」とし、奴隷の生産する綿花に依存するかぎり、イギリスの木綿工場主は「二重の奴隷制」に依存していることになる」と述べている。「アメリカ連邦の奴隷諸州の綿花独占は、自然的な独占ではなくて歴史的な独占である」。

ところで、当時イギリス綿製品の需給関係はつぎのような状態にあった。同じく右論説はこの点についてつぎのように述べている。すなわち右『トリビュン』の論説においてマルクスは、「アメリカの戦争がおこって以来、綿花の価格と綿糸の価格との間の破滅的不均衡がはっきり現われたのはこの八月に入ってからであった」とし、これまでは綿製品の価格はインドやシナへの「思惑的な積出し」によって保たれてきたが「これらのアジア市場もすぐにいっぱいになってしまった」と述べ、この供給過剰の様子をつぎのようにしるしている。カルカッタではイギリスからの着

荷が多いため「滞貨が増大しつつある」と報じている、ボンベイ市場も「まったく供給過剰におちいつている」、またイギリスからの積出しが多すぎるほか、「いくつかの事情が、インド市場の縮小に与つて力があつた。インドの西北諸州では、最近の飢饉にひきつづいてコレラが蔓延しており、また下ベンガル州全体にわたつて雨が多すぎたために洪水となり、米の収穫に重大な損害を与えた」、しかも製品がインドで売られている価格はマンチェスターの現在の相場よりも低い、「シナ市場でも輸入ストックの滞貨のために価格は低下を余儀なくされた」。かくして「このような状況のもとでは、イギリス製綿製品の需要は低下し、その価格はもちろん原料価格の累進的上昇に追いつくことができず、それどころか、木綿の紡績、織布、捺染などとはとうぜん多くのばあい生産原価をつぐないえなくなつてゐる」。そしてここでマルクスは「太物紡績にかんするマンチェスター最大の一製造業者のばあい」だとして一八六〇年九月十七日には綿花原価一封度六ペンス $\frac{1}{4}$ 、一封度当り紡績費用三ペンス、十六番手たて糸を一封度当り一ペンスの利益を含んで売るばあい一〇ペンス $\frac{1}{4}$ 、綿花原価と糸売り値との差額四ペンス、これにたいして一八六一年九月七日にはそれぞれ綿花原価九ペンス、紡績費用三ペンス $\frac{1}{2}$ 、一封度当り一ペンスの損失で売るばあい一ペンス、綿十花原価と糸売り値との差額二ペンス、という例を掲げている。

すなわち、一方において一八六一年八月末からリバプールにおいて綿花のいちじるしい昂騰が生じており、紡績、織物工場では操業時間を週三日に短縮し、一部の工場ではまったく機械の運転を停止したが、それでも「四カ月もたてばリバプールの綿花のストックが枯渇してしまふであろう」ということは、統計的に立証されている」という状態であり、他方においてアジア市場は供給過剰になつてきており、原料綿花の騰貴にたいしてこれと製品価格との間の「破滅的不均衡」がこの一八六一年八月に入つてから生じている、というのである。さきに一八六〇年一月二十六日付の

手紙でエンゲルスは「インドではあらたな恐慌が準備されている」とし、綿糸が高く原料綿花が安いので生産の大拡張が行われており、——取引にあたって用いられている過度の信用を度外視しても——「生産の増加だけからしてもこの秋、遅くとも一八六一年春までには、大規模な崩壊がやってくるだろう」と書いていたが、いま一八六一年夏にアジアでの供給過剰、しかも原料綿花の騰貴という事態が生じたことになる。一方において現実のものとなりつつある綿花飢饉、綿花の価格暴騰、他方における製品の供給過剰。イギリスの木綿工業は一八六一年の秋こうした問題に逢着したわけである。

四

この綿製品の供給過剰について、マルクスは翌一八六二年二月八日『ブレッセ』所載の論説「綿花恐慌について（Zur Baumwollenkrisis）」（執筆日付二月三日ころ——大月選集「著作年表」。大月選集訳、補巻一、一八三—一六ページ）において、数日前に開かれたマンチェスター商業会議所の年次会議での模様を伝えつぎのように記している。

「すべての演説者たちは、一八五八年以来、大西洋岸市場に前倒のない過剰供給がおこってきていること（大西洋岸市場とはどこを指しているのか明らかでないが、すでに「一八五八年以来」前例のない過剰供給がおこってきたというのは、一八五九—一八六〇年はイギリス木綿工業にとってともかく大景気の年であったのであるから、ちょっと納得がいかない）、またたえずつづく大規模な過剰生産の結果、アメリカの内戦やモリル関税（「アメリカの下院議員 J・S・モリル Morrill」によって提議され、内戦勃発のすこし前一八六一年三月に成立した北部産業資本保護のための保護関税）や封鎖がなくても、現在、不景気はいや、おう、なしにおこらざるをえなかったことを、告白している。これらの悪事情がなかったならば（内

戦等がなかったならば、昨年度の輸出の減退が六百万ポンド・スターリングまで達したかどうかともちろんまだ問題として残るが、⁽¹⁶⁾アジアとオーストラリアの主要市場が、十分十二か月にのぼるイギリス綿製品をストックしているという話を聞くと、どうもありえなかったことではないように思われる。／＼こんなわけで、この問題の権威たるマ、ン、チ、エ、ス、タ、ー、商、業、会、議、所、の、言、に、よ、れ、ば、イ、ギ、リ、ス、紡、績、業、の、恐、慌、は、こ、れ、ま、で、の、と、こ、ろ、ア、メ、リ、カ、の、封、鎖、の、結、果、で、は、な、く、て、イ、ギ、リ、ス、の、過、剰、生、産、の、結、果、な、の、で、あ、る。し、か、し、ア、メ、リ、カ、の、内、戦、が、つ、づ、く、結、果、は、ど、う、な、る、で、あ、ろ、う、か？　こ、の、問、題、に、た、い、し、て、も、わ、れ、わ、れ、は、異、口、同、音、の、答、え、を、受、け、と、る。す、な、わ、ち、勞、働、者、階、級、に、と、つ、て、は、測、り、知、れ、な、い、苦、痛、小、製、造、業、者、に、と、つ、て、は、破、産、で、あ、る。チ、ー、タ、ム、氏、は、つ、ぎ、の、よ、う、に、述、べ、た、『ロンドンでいわれているところによれば、彼ら「小製造業者」は手持ちの綿花をまだ多量に持っている。しかし綿花が問題なのではなく、価格が問題なのである。現在の価格では、工場主の資本は破滅されつつある』（傍点―三宅）。

W・O・ヘンダーソンもまた前掲書のなかでつぎのように書いている。「綿花恐慌はもっぱら原料の不足だけに原因したものではなかった。⁽¹⁷⁾……マンチェスター商業会議所は一八七〇年につぎのように述べている、アメリカの内戦前に木綿工業は『過度に拡張され、信用機能は妥当でない限度まで拡大されていた。かくして木綿取引はきわめてきびしい試練に堪えうるような状態にはなかったものであり、過度の拡張とその結果としての運転資本の欠乏とによって弱体化されていた工場主たちは衝撃を受けたのであった』と。アメリカの内戦がたとえなかったとしても、木綿工業の不況期があったこと、その間工場がショート・タイム操業となり、大きなストックが安値で売り払われたであろうことは、ほとんど疑う余地がない。綿織物の輸出は一八六一年の二五六三百万封度から一八六二年には一六八一百万封度〔封度でなくヤードであろう〕に減少し、綿糸の輸出は一七七百万封度から九三百万封度に減少した。状況は「ヨ

「ロツパ」大陸の木綿工場での過剰生産によって一そう悪化され、M・ウィリアムが『すべての外国市場の木綿ストックがなくなる時期がいまやまもなく到来するにちがいない』という期待を確信をもって表明しえたのは、ようやく一八六三年のはじめのことであった。／＼それゆえ、一つの点において綿花飢饉はランカシアの多くの製造業者にたいして有利に作用した。綿花飢饉のため彼らは——ただちにでなかったことは事実だが、しかし一八六二年の秋および一八六三年の春にはたしかに——ついこの間の過剰生産の時期の後に予想していたよりもはるかに高い価格で綿製品のストックを売り切ってしまうことができた」(op. cit. p. 11—12)。

(16) 前掲『ブレッセ』論説「経済ノート」の後段において、マルクスは Board of Trade の最近の月報によってイギリスの輸出入の数字を見ているが、そこで輸出は一八六一年一月から九月までの間に前年同期に比して「約八百万ポンドの減少」を示していると述べている——そのうち「五、六七一 七三〇ポンド」は合衆国向けの減少で、これは二五パーセント以上の減少であった——。これは九月までの数字であり、年間でいうと一八六一年は一八六〇年に比し既掲のように約一千百万ポンドの減少であった。したがって、上で「六百万ポンド」の減少とっているのは綿製品だけについていっているわけである。なおマルクスは、そこに発表されている八月までの輸入について、一八六〇年のこの期間の輸入小麦は六、七九六、一三九ポンドにすぎなかったが一八六一年の同期は一三、三四一、三八七ポンドにのぼっているとし、イギリスのアメリカへの輸出は減っているが、ニューヨーク港のイギリス向け輸出は増大したので、「この期間中、イギリスへのアメリカの金の輸出はほとんどとまったが、反対に、現在イギリスからニューヨークへ金は何週間も流出しつづけている」と述べている。一八六一年は一八六〇年につづいてイギリスの収穫は不良であった——「一八六〇—六二年の収穫不良 (poor harvest)」(Hendersen; op. cit. p. 8)。またそこでマルクスは、イギリスのフランスへの輸出はオランダへの輸出と大差がないのに、フランスからの輸入は急増しているとして、「イギリスは現在フランスの主要な輸出市場となったのに、一方フランスはイギリスにとつてはまったく第二義的な輸出市場にとどまっている」と述べている。これは、一八六〇年一月に結ばれた英仏通商条約がイギリスのフランスへの輸出を大いに盛んにするであろうと期待されていたことにたいして書かれているものと思われる。マルクス、

エンゲルスはこの自由貿易協定の効果を疑問視していたようであるが——たとえば一八六〇年一月二十六日付エンゲルスからマルクスへの手紙——、その後対仏輸出は大きく増大し、この一八六〇年代におけるイギリスの輸出発展のうえにかなりの役割を演じることとなった。

(17) ヘンダーソンはここにつきのような註記をしている、「当時多くの人々はアメリカの戦争が恐慌の唯一の原因だと信じていたのであって、木綿製造業者たちもとうぜんこうした印象をすこしも打ち消そうとはしなかった。……同時代のエコノミストたち(カール・マルクス)、歴史家たち(J・ワッツ Watts, R・A・アーノルド Arnold)、時事評論家たち(トレンズ Torrens)、および事情に通じた人々は一般に真相を認識していた」と(ibid. p. 11)。